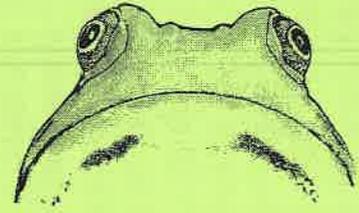


やまぐち自然派宣言

No. 3



自然共生の思想

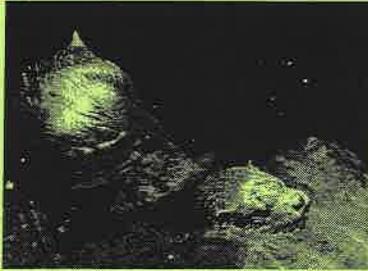
仏教がみつけた人と自然のかわり。ここにはみごとに共生の思想があった。

共生



特集 秋吉台国定公園

指定五十周年記念「やまぐち自然共生ネットワーク・リレーミーティング」の記録



秋吉台地下水系

ラムサール条約湿地登録記念シンポジウムの記録

やまぐち自然共生ネットワーク

2006年5月10日

竹随想

山口県は荒れた森林をよみがえらすために、森林税を徴収し、森づくりに取り組んでいる。かつて山口県は優れた竹の生産地であったが、竹の需要が伸びないため、放置されることが多くなってきた。最近では、竹は森林に侵入し、木々をいためる悪者になっている。

山口県は森林税を使って、森に侵入した竹の伐採を進め、森の再生に取り組んでいる。お陰で伐採されたたくさんの竹材が放置されている。

先日、テレビを見てみると、ある企業家が竹の利用範囲をどんどん広めて、採算がとれるように工夫している話が放送されていた。例えば、竹の表面を覆う表皮には強い殺菌力があり、殺菌剤が製造された。また、竹は冷蔵庫の防臭剤にも利用された。繊維は紙や断熱材、竹を蒸したときに出てくる液体は肥料に使われた。竹を板にした板材は家の床に使われた。竹は竹炭にもされる。実に多様な利用法がある。このように見ると、竹は宝物だといえる。じっくり研究をすると、利用範囲は果てしなく広がるという話だった。

竹を愛した詩人に萩原朔太郎がいる。竹のまっすぐに伸びる力をたくさんの方に詩にした。

竹

光る地面に竹が生え、
青竹が生え、
地面には竹の根が生え、
根がしだいにほそらみ、
根の先より、繊維毛が生え、
かすかにけぶる繊維毛が生え、
かすかにふるへ。

かたき地面に竹が生え、
地上にするどく竹が生え、
まっしぐらに竹が生え、
凍れる節節りんりと、
青空のもとに竹が生え、
竹、竹、竹が生え。

竹をすなおにうたった心が読者に伝わって、ファンは増えた。

三月頃だったが、私は秋吉台の竹林を訪ねた。すると、竹林のあちこちから、枯れた竹の破裂音が聞こえてきた。竹の節間の空気が

春の陽気に暖められて膨張し、破裂して、音になった。狸の腹鼓の話はこんな現象から起こったのではなかったか、一人納得したことを覚えていた。それにしても、竹林で聞いたポン、ポン・・という音は神秘的だった。

竹を生涯撮影している写真家の話を聞いたことがある。戦争から引き上げてきたとき、雪にしなる竹の美しさに感動して、竹の写真を生涯撮影し続けてきた。竹のしなやかなしなりも忘れられない美しさを秘めている。

竹の絵は、多くの家で飾られている。中国では竹は祝いや吉祥を示す。特に竹に霊茸を配した絵は、多くの人々に喜ばれてきた。竹に幸運を願う心が伝わってくる。

節ぶしは
みんな違つて
みんないい。

こんな色紙をもらったことがある。竹を愛する人の句だった。

やまぐち自然共生ネットワーク

理事 庫本 正

共生の思想を考える

仏教哲学の示す共生

自然共生ネットワークが誕生して、私たちは、「人が自然と共生してゆく社会づくり」の実現に努力してきた。そこでは、自然共生とは何かを考え、自然共生の思想を徹底的に追求し、これを普及しなければならぬことになる。

自然共生の思想の歴史をひもとくと、仏教がとて大きな役割を演じてきたことが分かる。仏教は多くの日本人の「物の考え方」に多くの指針を与えたからだ。

仏教は奈良時代に日本に入ってきた。やがて空海や最澄、道元、親鸞・・・など多くの偉大な指導者を生みだし、教義は深められていった。そして日本人の正しい生き方について実践的な教えを普及した。最終的には、厳しい修行や座禅を行って、悟りを開き、「人間として最高の心をもった人」に高まるための努力をする。言葉を換えて云えば「即身成仏」をめざして修行を積み、人間の本体を知り、清らかな心をもつ真人間になるといふことだろう。

哲学者中沢新一氏はかつてネパールで仏教

の修行をされた時に驚くべき体験をする。ある日の早朝、修行僧の一行はヤギのとざつ場に行つた。まだ薄暗い時だが、ヤギが殺され、解体されて行く。それを見学した後、指導の僧が「あのヤギは貴方のお母さんですよ」といった。お母さんはヤギに姿を変えて、子供たちに全ての愛、いや肉体までも与えているというのだ。

この話は人の魂が草や虫、動物にも移り住むという古くからの考え方を土台に、「他利につくす」ことを示していた。母は子供に身体まで提供して大事に育てるといふ究極の愛を語っている。そういえば、釈迦の修行中に飢えたライオンに身を投げ出して与えたという正倉院にある玉虫の厨子に描かれた絵の話を思い出す。

これは、いかなる動物や植物も、人と同じように存在しているわけで、人も動物も同じレベルに置かれている。仏教が「殺生をしない」と云う教義を貫いていることと共に重要な教えであり、自然との共生を教える前提事項だ。

仏教には想像を絶する厳しい修行が求められている。比叡山には「千日回峰行」という厳しい修行がある。七年間で千日の山駆け修行をする。一日三十キロから三十八キロを走破する。その間で、巨岩・巨木、湧き泉・流れ等々あらゆる自然物を押んで歩く。

山での修行は全国各地に広がっていた。この祈りでは、修験者が山で出会う生命世界へのめり込み、人が自然に生かされていること



を体得することだった。そればかりか人の力ではどうすることもできないものをこの山のエネルギー世界に祈るしかなかった。

山の実り、いや田や畑の作物も自然の力に依存している。だから修験者は身体をもって豊作の祈りを込める。それはことごとく自身のためというより、自分以外の幸いを祈ることにより比重が置かれる「利他行」に徹していた。

また、禅では、人が自然と一体化し、これが「内なる自然」を満たして行く。明恵上人は山の中にある石や木のうつろ、木の上などあらゆる場所で座禅し、そこにすみリスや鳥、虫たちと同じ目線のなかで暮らした。こうして、彼らは体験的に人が自然と共生していることを深く認識していった。加えて、人の心の中に芽生えた「内なる自然」を広げ、深め、活性化した。

ムラサキノ 雲ノウエニソ

ミヲヤドス

風ニミダルル 藤ヲシタニテ

明恵上人

道元禅師は、「山のなかで聞いたり感じたりしたこと(声溪山色)は、仏の説法である」信じた。自己と一体になった功德は果てしなく高く、広い。山に分け入って、草木虫魚の



生命エネルギーを全身に受けて、山が私なのか、私が山なのかという思いに耽るならば、山は生きていることを理解できる。

このように仏教徒は山中で、主体と客体、私と生態系が一体になった円環運動、つまりエコロジーをふまえた仏教の思想を展開したのでろう。ここに現代が抱える地球環境問題へ放ちうる普遍的なメッセージがあるように思えてならない。

仏教の教えは、僧侶を通して広く人々に広められていった。いわば国民の一人ひとりにいたるまで、仏教の教義は広められた。こうして、私たち日本人の心の奥底を流れる考え方が生まれたのだらう。

ところが、明治になり、西洋文化が流れ込むと、人間の力を信じる思想が広まって、それまでの日本古来の思想はすたれて行く。ここで勢力を拡大したのが人間中心の考え方だった。私たちも子供の頃には、「人は万物の霊長だ」とか「自然は人のためにある」といった考え方が普通で、人と野生生物との間には上下関係が認められていた。ここでは害虫や益虫といった考え方も生まれ、今でも人の心の奥で生き続けている。人の経済活動では、お金のために自然を壊すことだって大きな抵抗にはならなかった。だから、自然を平気で壊して、道路や建物を建てていった。

いま、私たちは生態学に根ざした理論を教えると共に、自然の中で虫や草と同じ目線で暮らし、昔の人々が体得した自然との一体感を取り戻す暮らしをしなければならないと思ふ。

生涯自然を哲学した串田孫一は自然と対話をしようという呼びかけをしていた。人が自然に話しかけると、必ず自然は返答して来るというのだ。ここに人の心は自然と通じ合い、深い信頼が生まれる。これが自然との共生の第一歩だという。自然と心が通じ合うと、人の心は豊かになる。素敵な暮らしが約束される。

(庫本 正)

第2回リレーミーティング

in 秋吉台の概要

●日時 平成十七年十月二十九日(土)

三〇日(日)

●場所 主会場：秋吉台家族旅行村

副会場：秋吉台エコ・ミュージアム

●主催 やまぐち自然共生ネットワーク

●共催 山口県 秋芳町 美東町

・参加者 十月二十九日：五四人

(エコツアー五一人)

十月三〇日：約三〇〇人

(エコツアー約五〇人)

●プログラム

十月二十九日(土)

一 日程

12:30 受付開催

13:00 あいさつ 庫本実行委員長

山口県自然保護課長

13:30 ワークショップ(エコツアー)

18:30 交流会

二 内容

ワークショップ

「自然や文化を求めて地域を巡る活動」型

A-1 洞窟探検 中尾洞コース

エコツアー

i 参加者 二一人(男一八人、女三人)

ii ガイド 庫本正

(秋吉台科学博物館名誉館長)

iii 内容

非公開の鍾乳洞(中尾洞)探検。

洞窟の奥での、洞窟生成物の解説と洞窟性生物の観察、暗闇探検、詩(時とは何なんだろう)の朗読。

A-2 洞窟探検 景清洞・大正洞コース

i 参加者 九人(男四人、女五人)

ii ガイド 前田時博

(秋吉台エコ・ミュージアム館長)

iii 内容

三角田川が吸い込まれ地下水となる「犬ヶ森ポノール」において、秋吉台地下水系の概要説明。大正洞では、名前の由来の説明、複雑な構造をしている立体洞の説明、地下水の行方、洞窟性動植物の解説等をした。

景清洞では、名前の由来や全国的にも珍しい貫通洞を解説。特徴ある地下水系について説明。



A-3 洞窟探検 秋芳洞コース

応募者一名のため、他のコースと合体

B 樹林探訪

i 参加者 二二名(男八人 女一三名)

ii ガイド

藤原 俊廣(樹木医)・安部 綾子

松井 茂生(秋吉台の自然に親しむ会)

iii 内容

秋吉台の三つの異なる森(長者が森人工の森・地獄台のブッシュ)を探訪し、植物相から見た森の生い立ちや植物遷移を通して、森の不思議にせまった。



十月二〇日(日)

一 日程

8:30 受付開始

9:15 あいさつ(小笠原副会長)

9:30 野外活動(エコツアー)

12:00 昼食

13:00 記念式典

あいさつ 西岡会長

山口県環境生活部長

秋芳町長・美東町長

写真コンテスト表彰

13:30 記念講演

(財)国立公園協会理事長

瀬田 信哉

14:25 秋吉台へのメッセージ

14:40 秋吉台で自然で自然を考えよう

活動報告・討論

16:30 秋吉台宣言

二 内容

野外活動

「自然の営みにふれる観察会への参加」型

エコツアー

①秋吉台の自然を探る

i 参加者

(午前の部)三八名(男一九名 女一九名)

(午後の部)四四名(山野草自生地視察会)

ii 主催 秋吉台の自然に親しむ会

秋吉台科学博物館

iii ガイド

(午前の部) 阿部 弘和・松井 茂生

(秋吉台の自然に親しむ会)

(午後の部) 多賀谷 美枝子・宮田 文

(秋吉台の自然に親しむ会)

iv 内容

龍護峰(秋吉台の最高峰)とおはち山に登り、草原維持の課題と減少する草原性植物について、レッドデータブックに関連付

けて解説。植林地や採石跡地などで景観保全の視点から意見交換。

(解説内容)

・ 観察コース上で開花している植物について

・ 秋吉台草原の植生の違いについて

・ 秋吉台の絶滅危惧種オキナグサやムラサキ等について

・ 秋吉台草原への帰化植物の進入と草原植生について

・ 龍護峰から観察できる、産業として利用されている秋吉台及び国定公園としての秋吉台について

② 秋の秋吉台を訪ねて

i 参加者 二〇名(男九名 女一一名)

ii 主催 秋吉台エコ倶楽部

iii ガイド 山城 曜・福富 孝義

(秋吉台エコ倶楽部)

iv 内容

秋の草花センブリ、リンドウ、ウメバチソウの観察をしながら北秋吉台の名峰真名ヶ岳まで散策。地層の逆転が最初に発見された帰水で地形的特徴や地下水系の解説。



③ 森の教室(音の地図をつくってみよう)

i 参加者 八名(男五名 女三名)

ii 主催 おふくかんさつの森ファンクラブ

iii ガイド 増原 啓一・福重 麻紀

(おふくかんさつの森ファンクラブ)

多賀谷 美枝子

(秋吉台の自然に親しむ会)

iv 内容

音の地図、樹の拓本の作成

④ コウモリの観察

i 参加者 一四名(男九人 女五人)

ii 主催 山口哺乳類研究会

iii ガイド 松村 澄子(山口大学)

iv 内容

非公開の兼清洞でのコウモリ観察

バットデイクターで、コウモリの超音波を聞いた。

野外活動

「環境保全のための貢献活動」型

エコツアー

⑤ 三角田洞窟清掃

i 参加者 九人(男七人 女二人)

ii 主催 秋吉台エコ・ミュージアム

iii ガイド 前田 時博・田原 義寛

(秋吉台エコ・ミュージアム)



IV 内容

三角田洞は、三角田川で景清洞とつながっているが、通常は、水没しており通り抜けれない。しかし、川といっしょに流れてきたゴミが堆積し、思わぬところで環境汚染が進行している等の説明ののち、三角田洞の洞窟清掃(流れ込んだゴミの回収)と洞窟探検を実施

⑥ 草原の修復

i 参加者 一七人(男一五人 女二人)

ii 主催 秋吉台パークボランティア会

iii ガイド 河野 重智

(秋吉台パークボランティアの会)

IV 内容

秋吉台パークボランティアの会の設立の目的や活動状況の説明と秋吉台の草原が、クヌギや竹の繁茂で狭まっている状況などの解説の後、ハチク延べ三〇〇本を切り倒し処理した。

⑦ 自然共生キャンペーンとクリーン作戦

i 参加者 三七名(男二四人 女一三人)

ii 主催 秋芳町自然保護協会

県美祢農林事務所

iii ガイド 上利 節夫(秋芳町自然保護協会)

IV 内容

家族旅行村から台上の道路上でゴミ、空き缶拾い(クリーン作戦)、台上で、公園利用者にゴミ持ち帰りのリーフレット、ポ

ールペン、柿の配布約二〇〇人（自然共生
キャンペーン）

研究会・発表会・展示

⑧ 山口県環境教育学会例会

i 参加者 一〇名

ii 主催 山口県環境教育学会

iii 講演会

・「秋吉台の水質と流域管理」

（山口大学工学部教授 浮田 正夫）

・「観光資源としての秋吉台」

（山口大学名誉教授 三浦 肇）

⑨ 美祢地区地方文化研究会合同発表会

i 参加者 約三〇名

ii 主催 秋芳町地方文化研究会

iii 講演会

・「美祢郡の石灰産業について」

（土屋 貞夫）

・「草原と秋吉台のかたつむり」

（増野 和幸）

・「思い出の記」

（小川 孝生）

⑩ 「秋吉台国定公園指定五〇周年記念」

・写真コンテスト

応募六八人 二〇七点

・秋吉台自然保護ポスター展

応募四七人

・秋吉台国定公園指定五〇周年

はがきアート展 応募六六人

記念講演

「国定公園指定五〇周年を祈念して」

講師 （財）国立公園協会理事長

瀬田 信哉

講演内容

「ネットワーク、八代や秋吉台での体験、

エコツアーについて」

・どの地域でも、地域にこだわって考え

て行動する人がいる。秋吉台、樫野川、
八代といろんなところで自然にこだわ
って活動している人がいる。そうした人
たちが山口県全体で集まり、ミーティン
グをする。ネットワークのできた意義が
ある。

私自身は、大阪生まれで、大学は北海
道、大阪以西の勤務は、長崎のみ。しか
し、山口県にこだわりをもって生きてき
た。萩。秋吉と。母親は防府の右田村出
身。こどものころは、母親の里に行くの
が楽しみであった。

・八代の鶴いこいの里に展示してある二枚
の切手。一枚は、マジャール（ハンガリー）
のツルの切手。もう一枚は、日本の鶴。ハ
ンガリーは、ヨーロッパにあるが、アジア
系の民族、日本の鶴の恩返しと同じ絵であ
る。それがアジア共通のものかどうか思い
をめぐらせている。



・八代の棚田の状況。ある企業の助成金で整備した。八代では、昨年、一二羽の飛来。一方、出水では、一万羽と桁違い。観光に役立つが、農家からは苦情も多い。この調整が行政の課題である。

・佐渡の棚田の状況。トキの飛んでいる姿を覚えているうちに復活したいと、お年寄りたちが棚田の復元に励んでいる。

・コウノトリの里、豊岡の状況。ここは、すべて土地改良済みで循環は切れており問題である。しかし、せめて冬の間だけ

でも何枚か田圃に水を入れようとしている。こうした活動への助成もある。

・諫早の干拓の状況。出水の丹頂が北に帰る途中休んでいる様子。

・何年前か前、私たちが実施した「八代のナベツルと秋吉台の山焼き」の旅のことを話そう。エコツアーと呼んで良い。まず、地元の人々の案内で八代盆地の周りをまわった。鶴塚、句碑、神社、鶴伝説の柿の木など鶴ゆかりの場所を二時間くらいかけて巡ったのち、最後に野鶴監視所に行った。ツルの時間を過ごしたといえる。ツルのいる村でツルと人との共生を共通体験したといえる。ツルを見るだけでなくツルを取り巻く環境をみるのが大切。自然が発しようにしているメッセージや歌に詠まれていることを追体験することが大切。これがエコツアーの本質であろう。

翌日の秋吉台の山焼きは、雪中中止。濡れた草原を歩いていたら、猪が七頭でてきた。車では出会えない体験だ。歩いたり、

人の話を聞いたりしてこだわりがでてる。たたずみ、自然が発しようとするメッセージに近づくこと。これがエコツアーといえる。

・奄美大島でのこと。洞窟の暗闇の中で、音だけに頼る体験。これもエコツアーだ。

ii 「制度としての自然公園：自然公園法」

日本の自然の風景が制度になつていくプロセスについての解説。

・世界自然遺産は、利用をイメージしていない。ラムサール湿地では、「賢明な利用」という考え方が織り込まれている。この秋吉台の草原も放牧や採草によって維持されてきた。利用があつて景観が保たれている、地下水系の水環境も保全されている。

・自然風景地の変遷。というより見る者の目の変遷といえる。

名所：名が立つ歌に詠まれた所。
旧蹟：歌に詠まれざる所。

日本の公園の始まりは、明治六年太政官布告である。

志賀重昂は、「日本風景論」（明治二七年）で「江山洵美なるこれわが郷」と述べているが、これは自分の生まれたところが、一番美しいということである。

また、日本の自然を「瀟洒・花・跌宕」といつているが、その信念は跌宕にある。跌宕とは、粹にはまらないうつけものという意味だ。

昭和二年に毎日新聞が募集した、日本八景がある。国民が日本の風景地を決めるということ画期的なことだった。日本八景、日本二十五勝、日本百景と選定された。秋吉台は、この日本百景に入っている。だが、森林や北海道は少ない。知床も白神も屋久島も入っていない。現在とは視点が違つのがわかる。

昭和九年国立公園法（目的：大自然の風景地を指定して守り、利用する。既存の景

勝地を指定し、保勝する。）が制定され、昭和九年に瀬戸内海をはじめ最初の国立公園が指定された。

国立公園は、昭和二四年に国立公園法が改正され、昭和二五年に琵琶湖や佐渡などが指定された。秋吉台と北長門海岸は昭和三〇年に指定され五〇周年を迎えた所である。

昭和三三年には、自然公園法が制定され、目的が、「優れた自然の風景地の保護と利用を図りながら国民の保健・休養・教化に資すること」とされ、国立、国定、県立自然公園が制度化された。昭和四七年には自然環境保全法が制定され、原生的自然の保全が図られるようになった。これは、利用を想定していない。平成四年には、種の保存に関する法律ができた。

自然環境の保護、保全対象は、すぐれた自然の風景から、それらに加え身近な自然、多様な自然への保護、保全と変遷している。

最後に、私の考えるエコツアーの要件を誤解を恐れず述べよう。

インタープリター（自然を解説する人）がいること

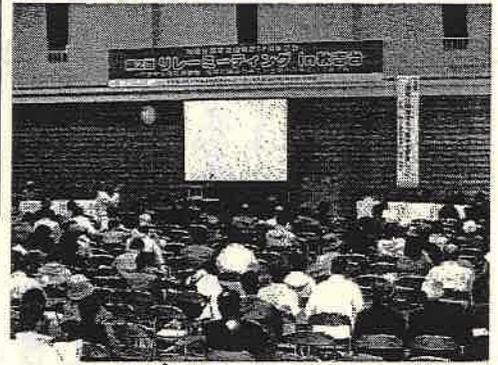
バスに振り回されないこと

旗を持たないこと

マイクをもたないこと（一対一〇の関係でなく、一対一の関係が一〇組あることが望ましい。）

インタープリターは、引き出しをたくさん持っていること（客のいろんな質問に答えなければならぬ。）

これらがエコツアーには、大事であると考えている。



秋吉台へのメッセージ

はがきアートで寄せられた思い

進行 庫本正

全国から六〇人、延べ二〇〇点の応募のあった「はがきアート」の作品をスライドで上映しながら、その方々の秋吉台に対する熱い思いを紹介。

メッセージを三つに分類し、作品紹介。

- ・ 学術的価値の高い自然を護るもの
 - ・ 心をいやしてくれる自然に感謝するもの（心のふるさと 心のオアシス 心の道場）
 - ・ 石や化石、生物に思いを込めた作品
- その後、にスライドによる「秋吉台の四季」の上映。

秋吉台で自然を考えよう

進行 河野 重智

○活動報告

「エコツアー・野外活動・研究会等からの

報告」の内容

A-1 洞窟探検中尾洞コース

・ はじめて入った。暗闇の中の詩の朗読で生きるパワーを感じた。

A-2 洞窟探検大正洞・景清洞コース

・ 感激したツアーであった。景清洞は、今、水が流れていないので奥まで入った。一生に何度も見られないすばらしい鍾乳石や日々変化する砂の堆積なども見られるツアーであった。ただ、鍾乳石が切り取られたり、ゴミや空き缶があるなど環境保全の重要さも感じた。

・ 今朝は、龍護峰に登った。秋吉台にこんなところがあるとは知らなかった。今までPRや情報は受け取っていなかった。できれば子供を連れてきたかった。正にエコツアーである。

B 草原の樹林探訪

・ 長者が森、地獄台、第2長者が森と巡った。地獄台では、ブッシュで解説を受けた。ブッシュも自然だが、木が育ちすぎると自然破壊になるとの説明は、私には、驚きであった。クヌギを伐採して草原を維持している解説もあった。

・ 長者が森では、人が来すぎて土が踏み固まれるなどの問題があったので第2長者が森（人工の森）を作って、台上にある様々な木を植え、観察できるようにしてあると説明があった。

①秋吉台の自然を探る

・ 龍護峰からおはち山に登った。介護ですつと家にこもっていたので、今日はすばらしい体験をした。リフレッシュしたので明日からの介護も、また、がんばる。

・ スズメバチにもであったが、特に問題はなかった。スズメバチも秋吉台の一員との説明には、納得した。

・昔は、全部草原だったが、戦後、植林をされ草原が縮まり、これを復元するには相当経費がかかると説明があった。
・キノコ、秋吉台独特の花の解説があった。
・センブリも沢山あった。

②秋の秋吉台を訪ねて

・秋吉台エコ・ミュージアムから真名ヶ岳に登った。草花の名前を教えてもらった。

④コウモリの観察

・通常非公開の兼清洞で、冬眠中のキクガシラコウモリを観察した。

⑤三角田洞窟清掃

・洞窟の中は、真っ暗であるが生物は沢山いた。三角田洞は、川の水が流れ込んでぬけるのだが、コウモリをはじめ沢山の動物がいた。カエルもクサガメもフナもいた。
・子供たちにも参加して清掃活動を実施した。一部持ってきたが、この七、八倍はあった。プラスチックのトレイが一番多い。

つづいてペットボトルだ。



・「秋吉台の地下水系」がラムサール条約に登録されるが、こういう状況を踏まえて清掃活動を進める必要がある。秋吉台エコ・ミュージアムでは、昨年開始したが、山口大学の洞窟研究会では、もつと前からやっている。私たちでは潜れないところで清掃活動をやっている。

・秋吉台では、自然を求めて多くの人が訪

れるが、弁当がらや空き缶は是非持ち帰ってほしい。秋吉台は草原だけでなく森林もある。林道に家電製品、タイヤなどが捨てられている。森林は動物の生息の場所である。ゴミを捨てないで楽しんでほしい。

○意見発表

・年三、四回秋吉台で天体観測を開いている。秋吉台は、光害がないから満天の空が見える。夜の秋吉台もすばらしい。

・国際化の影響。固有種に対し、秋吉台の外来生物の説明がほしい。

(庫本)セイタカアワダチソウは、荒地地に育つ。秋芳町自然保護協会では、農薬を使ったりして対応したが、植物どうして喧嘩さすことを考えた。クズで喧嘩さす方法もある。

・秋吉台の生態系の維持のため山焼きをやっていると聞いたが、木が枯れているが？(庫本)山焼きは、草原をつくる手段。なぜ、草原が必要かというと、かつては、堆

肥にしたり牛馬の餌にするためであった。火に強い木（クヌギ、タケ）は、山焼きにも耐え残る。

・旧田万川町から来た。秋吉台は3回目の体験だが、生態系の話や裏の実態を聞いて良いところだけを見つめるだけではないなと思った。

（庫本）秋吉台の草原が、風邪ひいたり、病気になったらどうしましょうか？

・汚染されているとまではいかないが、県内の工場からの排ガスが、風によって、酸性雨や重金属になって、秋吉台に降りる可能性がある。

（庫本）先日、長者が森に座り込んで自然を感じていたら、落ち葉が昔より少なくなっていることに気づいた。ツバキの木は、穴だらけであった。演習場であったころの鉄砲の弾が入ったものである。この木は、倒れやすい。いまのうちから何とかしなければと思っている。

・ボランティアによる修復作業ももちろん

重要だが、外から来る人たち（観光客等）への意識啓発が大事と思う。

（藤原）長者が森が衰退してきている。原因は、いろいろあるだろうが、森の周辺の草刈りも一因だ。刈り込むと乾燥したり、光が入ったりして生態系に影響を与える。

また、人が踏み固めると透水性に悪影響を与え、木の根が傷む。台風被害もある。長者が森を守るためには、草刈りはあまりしないほうが良い。踏み板や飛び石の設置も必要だ。

（庫本）長者が森は、「杜さま」である。その地域を守ってくれた神様のようなものだ。ヘビやカエルと同じように信仰の対象になっている。

（田中）カエルフォーラムの活動や学生時代からの研究で、カエルから見た秋吉台の変化について気づいたことがある。秋吉台は、外見は変化がないが、中身は変わってきているのがわかる。

（庫本）心を癒してくれる秋吉台がある一

方、長者が森の状況からも分かるように不健康な秋吉台もある。どうしたら、健康な秋吉台が取り戻せるだろうか？

・秋吉台での自然保護の活動内容を紹介してもらいたい。

（庫本）壊れたところの修復、セイタカアワダチソウの撲滅、赤土部分の緑化、美しい風景を写真にとる活動、火に強い木（クヌギ、タケ）を除去する作業などがある。また、エコツアーをするには、感動を与えること。自然の一番いいところでのインタビューリレーションが大事。

・教育が大事とのことであったが、子供の教育には、まず、大人や親が範を示さなければだめだ。

・先ほどのゴミを上流の人に見せ、話し合いをしてほしい。

（田原）水系からみた秋吉台は、通過点である。フィルターの役目をしている。湧き水は、ゴミが取りのけられ一見きれいに見えるが、実際は汚染されている。同じ秋芳

町内でも下流の人が上流にきて水を汲んでいる。以前では考えられなかった。源流部、上流部が大事である。

(庫本) イギリスの風景管理計画が参考になる。長い年月を懸けて取り組んでいる。(部長) 秋吉台は、山口県にとっても大切なところ。継続して保全活動に取り組まれていることに頭が下がる思いだ。

(会長) 秋吉台を思う心、秋芳洞を思う心がひしひしと伝わってきた。伝えることの難しさとともに、人に頼るのでなく、まず、自分が実行することが大切だと思った。

秋吉台宣言

宣言者 開村 修二

私たちは、国定公園指定五〇周年、またラムサール条約湿地登録の年に秋吉台に集い、カルスト台地や地下の洞窟の自然に包み込まれた。ここで長年にわたる科学的な研究成果をかみしめ、また自然の息吹を心で感じて、秋吉台が人類の宝であることを深く理解できた。そしてこの素晴らしい財産を後世に引き継ぐための具体的な方法について熱く語り合った。私たちは、「やまぐち自然派宣言」の主旨にのっとり、またこの大会の議論を生かし、人類の宝として秋吉台を、みんなの力で護ってゆく努力を惜しまないことをここに宣言する。

次回リレーミーティング

あいさつ 錦川流域ネット交流会から

来年度、第三回リレーミーティングは錦川流域で開催予定です。レッドデータブックややまぐちの中にも、錦町を中心とした錦川流域の貴重な野生生物がたくさんございます。この絶滅のおそれのある貴重な植物、動物を守っていかなければならぬと思います。開催場所は、錦町のらん交流センターを予定しています。開催時期は十月頃を予定しています。錦川流域、中国山地の動物、植物の保護についてをテーマに考えています。先日の台風一四号で、錦川流域も大変な被害を受け、錦川も悲惨な状況になっております。日本一きれいな川をめざし、取り組んできましたが、一からやり直します。くじけずに頑張ってくださいと思います。ぜひ来年は錦川流域にお越しください。お待ちしております。

「秋吉台地下水系」ラムサール条約湿地
登録記念ワークショップの開催結果

平成十七年二月二六日（土）、山口県、秋芳町、美東町の主催で、「秋吉台地下水系」ラムサール条約湿地登録記念ワークショップが秋吉台科学博物館で開催されました。秋吉台地下水系の保全と賢明な利用をテーマに掲げ、講演やパネルディスカッションなどが行われました。

ラムサール条約第九回締約国会議の報告

〈環境省自然環境局野生生物課

課長 名執芳博〉

第九回締約国会議が、一月八日から十五日までウガンダのカンパラ市郊外で開催された。加盟国一四七ヶ国のうちの二二〇ヶ国から約一〇〇〇名が参加した。

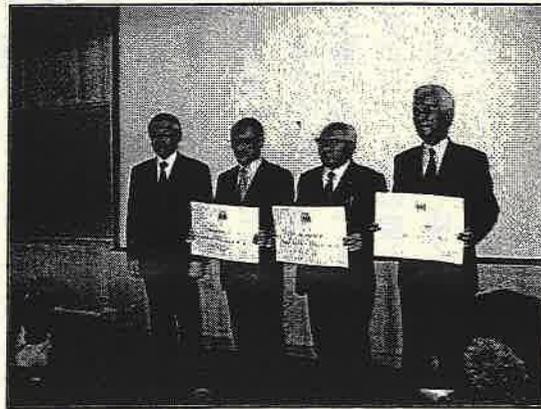
本会議では二五本の決議が採択され、開会式では中村玲子さんがラムサール湿地保全賞を受賞された。

また、本会議と並行して行こなわれたサイドイベントで、条約事務局長から登録認定証が授与された。



登録認定証伝達

登録認定証が環境省名執課長から山口県久保環境生活部長、秋芳町上利町長、美東町倉増町長に伝達された。



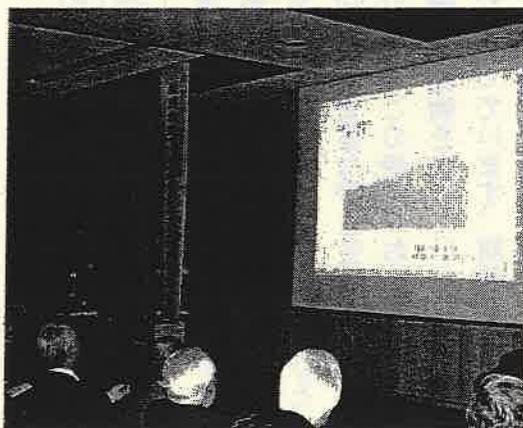
講演「秋吉台地下水系と洞窟を探る」

〈北九州市立いのちのたび博物館

特別研究員 藤井厚志〉

上流域の美東町から下流域の秋芳町並びに美祢市まで網の目のように広がる秋吉台地下水系について、次のような興味深い現象や特性などを水文地質学の観点から紹介した。

・カルスト地帯の地下水面の変動



・「温水」「蛇ノ池」「曾和」の湧き水
・蛍光染料を使った地下水系の追跡調査
・竜宮穴からの地下水の吐出
・秋芳洞内の幽霊滝の水量変動
・帰水のドリーネ湖と地下水瀑
・景清洞や竜元洞などの特徴
・弁天池、美祢市祖父ヶ瀬などの湧泉
また、生活排水や雨の影響を受けやすい秋吉台地下水系の特徴を説明し、「自然本来の地下水系のシステムを保存、復元し、未来へ伝えていく努力が必要」と訴えた。

パネルディスカッション

「秋吉台地下水系の保全と賢明な利用」

〈コーディネーター〉

庫本 正（秋吉台科学博物館名誉館長）

〈パネリスト〉

名執芳博（環境省野生生物課長）

藤井厚志（北九州市立いのちのたび博物館

特別研究員）

中村玲子（ラムサールセンタージャパン

事務局長）

山本時博（山口県観光戦略会議議長）

松村澄子（山口大学助教授）



庫本

最初に、秋吉台の印象や現状についてお伺いしたい。

中村

ラムサール条約は水鳥の生態系が中心にあったが、「秋吉台地下水系」は目に見えない水を守る、あるいは知る人も少ない小さな生き物を含めた生態系を守るといって、ラムサール条約の新しい扉を開くシンボルのような存在だと思う。

名執

カルスト地下水系の保全価値には、自然という面で数々の価値があるが、それだけではなく、飲み水の供給、農畜産業への水の供給、観光、レクリエーションなど社会経済的にも重要な価値がある。秋吉台地下水系はこのような価値を総合的に生かしていくような場所だと思う。

藤井

秋芳洞は水が少なくなってきたという実感がある。また、洞窟の中も、鍾乳石が折られたり踏みつけられたりして荒れてきている。保全・復元していくことが大切だと思う。

松村

モモジロコウモリは昔に比べてずいぶん少なくなつたと感じている。モモジロコウモリというのは典型的な川のコウモリであり、それが減少してきたということは、川の生産力

が落ちてきているのかなと考えられている。

山本

私たちは結果観光という言葉を使っているが、地域振興をしつかりやった結果として観光というものが生まれ盛んになっていくべきだと考えている。ここにはあまりに偉大な自然遺産があり、それに頼りすぎていたのではないかと思っている。

ラムサール条約の登録が観光客を呼ぶ看板になるという考え方はなく、ラムサール条約の精神を生かした地域づくりがここからはじまり、そのことによつてより個人客に対応した観光地づくりがはじまるんだということを強く訴えたいと思う。



庫本

様々な分野での課題が示されましたが、その課題にどう対処すべきでしょうか。

藤井

地下水系を適切に保全していくためにも研究の拠点としての博物館の拡充が必要だと思う。

また、カルストというのは浄水機能の劣ったシステムだということを常に念頭に置いておくことが大切だと思う。仮に上流で汚染が起こればそれが直ちに下流へ影響する。

松村

ラムサール条約に秋吉台の地下水系が登録されたので、大学として水系を維持していくことに貢献できるような研究を進めていきたいと考えている。

山本

これからの観光は、知的興奮とか知的満足を伴うものが必要ではないかという気がする。知的満足感、知的高揚感を伴う旅の形態ということでグリーンツーリズムをはじめ何々ツーリズムというものが流行っているが、この流れは本物であるとか確信をしている。そうした意味で、この地域におけるツーリズムは何をさておきエコツーリズムだろうと思う。

エコツーリズムというのは言葉で

中村

言うのは簡単ですけども、実践し、人材を育て、施設を作り、ノウハウを積み重ねていくというのは大変なことであるし、時間をかけてやらなければいけないが、ここではラムサール精神にのつとつたエコツーリズムが新しい取り組みとして期待されるのではないかと思う。

ワイズユースというのは、それぞれの地域の自然の条件、社会的な条件、産業的な条件などいろいろなか条件の中で決まってくるということなので、何がワイズユースかという定義はないと思う。

この秋吉台に関しては、みなさんがずっと長い間ワイズユースを続けてこられている。だから今、これだけの規模の地下水系が残っていて、国際的に重要な湿地リストに登録されたということが基盤にあると思う。基本的にはこれまでのように秋吉台地下水系を大切にしながら暮らしていつて頂ければいいと思う。

ただひとつこれまでと違うことは、今までは山口県の秋吉台、美東町、秋芳町の鍾乳洞でありカルスト台地であったわけですが、これからは世界の地下水系、世界のカルスト台地

庫本

になる。世界中の人がここを見ているし、注目をしている。またここで、地元の人たちの努力を超えるような大きな問題が起ったときには、世界中の人から支援が受けられると思う。

秋吉台は日本国内だけでなく、人類共通の宝物だと改めて感じた。これからも地下水系の保全に一層努力していかねばならない。



編集後記

共生第三号をお届けします。この号は平成十七年十月に秋吉台で開かれた「秋吉台国定公園指定五十年記念リレーミーティング（やまぐち自然共生ネットワーク主催）（山口県・美東町・秋芳町共催）」の記録及び同年十一月に開催された秋吉台の地下水系がラムサール条約湿地に登録されたことを記念したシンポジウム（山口県・美東町・秋芳町主催）の記録を特集した。両イベントとも、たくさんの県民や町民が参加され、記憶に残る大会だった。この記念すべきイベントの全貌を詳細に記録し、会員の皆様にお届けできることを誇りに思っている。

また、本号には共生の思想を深める論考が掲載された。仏教国の日本では、共生の思想が隔々まで浸透し、教育されたようである。

編集係

庫本 正

田中 浩

高実 りか

